

仙台市沿岸部の震災復興メモリアル施設が来訪者の防災意識・知識へ及ぼす影響

東北大学	工学部	学生会員	○門倉	七海
東北大学	災害科学国際研究所	正会員	佐藤	翔輔
東北大学	災害科学国際研究所	正会員	今村	文彦

1. はじめに

東日本大震災発生以降、仙台市は震災の脅威と復興への取り組みを後世に継承する震災復興メモリアル事業に取り組んでいる。その拠点として、仙台市沿岸部に「せんだい3.11メモリアル交流館」と「震災遺構仙台市立荒浜小学校」の2つの震災復興メモリアル施設を整備している。せんだい3.11メモリアル交流館（以下、メモ館と呼ぶ）は、地下鉄東西線荒井駅舎内にある。東日本大震災を知り学ぶための場であり、津波の被害を受けた東部沿岸地域への玄関口としての役割もある。交流スペースや展示室を通じて市民が震災や地域の記憶を語り継いでいくための施設として、2016年2月に公開された。震災遺構仙台市立荒浜小学校（以下、荒浜小と呼ぶ）は、震災当時には320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた。震災当時のままの姿の校舎や被災直後の写真展示等により、来館者が津波の脅威を実感し防災意識・行動を高めるために、2017年4月30日に内覧可能な震災遺構として公開された。両施設は、仙台市内だけでなく市外や県外・海外からも多くの人が訪れる、震災伝承において欠かせない拠点になっているものの、実際に来館者の防災意識・知識の向上にどのような影響を及ぼしているか、現在明らかにされていない。本研究では、これらの施設にどのような人が来館しているか、施設が来館者にどのような影響を与えているか、来館者が何に満足できているか、という観点から2つの震災復興メモリアル施設の利用実態と効果を評価することを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、質問紙を用いて市政モニター調査と出口調査を行った。市政モニター調査では、2018年8月に仙台市民のうち200名の代表者に質問紙を送付し、187名から回答を得た。出口調査は、2018年9月下旬から11月下旬に、メモ館と荒浜小でそれぞれ9日間、10日間行った。

回答者は、18歳以上であることを確認した上で性別・年齢は考慮せず、著者らが各施設で来館者に声を掛け質問紙を用いて回答していただき、メモ館では60名、荒浜小では106名から回答を得た。質問紙は、回答者の属性に関する設問、災害への意識等に関する設問、各施設に来館した後の自身の意識変化に関する設問、各施設に対する来館前の期待と来館後の満足度に関する設問等を設けた。

3. 結果

市政モニター調査と出口調査から得られた各種データの集計結果を図-1～図-4に示す。図-1と図-2に示すように、来館者が各施設を知ったきっかけは、いずれもテレビ、新聞記事、市政だより等のメディアと回答した人が多かった。メモ館は地下鉄の駅舎内にあるために、偶然立ち寄った人も多かった（図-1）。一方、両施設ともホームページやフェイスブックで知った人は少なく、SNSの影響力が大きい現在において特別な対策が必要であると考えられる。

次に、施設が来館者にどのような影響を与えているかについて、図-3と図-4に示すように分析した。メモ館に来館してから「東日本大震災や津波被害に関する知識が増えた」や「東部沿岸地域の文化・暮らしに興味・関心が湧いた」に「とても当てはまる」と回答した人は20%を下回っており、この点に大きな課題があることが分かる（図-3）。荒浜小に来館してから「災害・防災に関する興味・関心が湧いた」や「災害への備えや心づもりが大きくなった」に「とても当てはまる」と回答した人は57人（それぞれ58.2%, 57.0%）で、回答者の半分以上が学びを実感をしており、荒浜小が一定の役割を果たしていることがわかる（図-4）。

来館者の各施設に対する総合満足度について、最高評価の「満足」と回答した人は、荒浜小は76.0%、メモ館は24.1%という結果が出ており、各施設に対する満足度には大きな差があり、メモ館の在り方を改めて考える必要があることが分かる。また、各施設が有している機能や内容について、それを来館前に期待していた人数と来館後

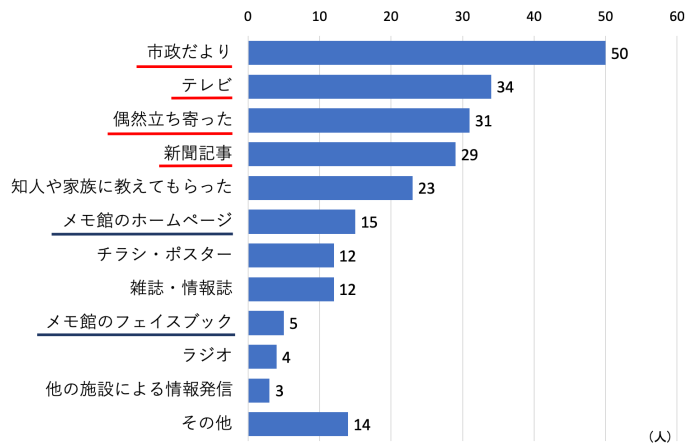


図-1 メモ館を知ったきっかけ

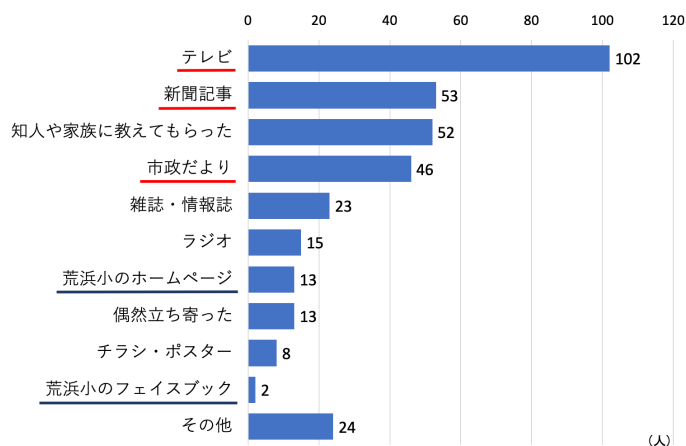


図-2 荒浜小を知ったきっかけ

満足度の対応関係を分析すると、メモ館は期待の大きさに対して満足度が小さく、荒浜小は期待の大きさに対して満足度が大きいということが全体的な傾向として明らかになった。メモ館では、「東日本大震災の被害の状況を知りたい」「仙台市の復旧・復興の歩みを知りたい」という期待が大きいものに対して、これらに対する実際の満足度は低く、この点が前述の総合満足度に影響していると考えられる。荒浜小では、「東日本大震災の被害の状況を知りたい」「津波に襲われた校舎に入り津波の脅威を学びたい」と期待していた人が多く、その満足度も著しく高い。一方で、荒浜小は「災害の備えに関する知識を提供する場」としての役割もあり、これを期待していた回答者は少なかったことから、今後この役割をよりアピールしていくことも重要である。

4. おわりに

本研究では、仙台市が整備している東日本大震災の脅威と復興への取り組みを後世に継承する2つの震災復興メモリアル施設について、市民および実際の利用者に対

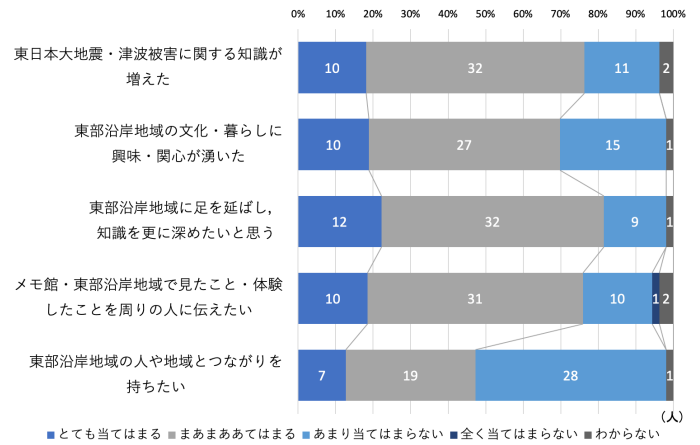


図-3 メモ館に来館してからの自身の変化

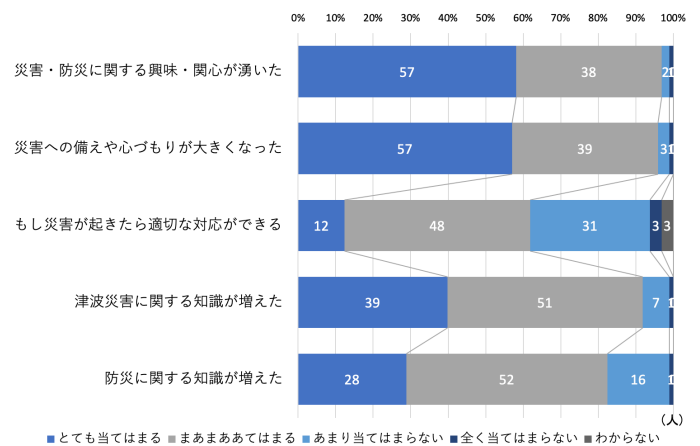


図-4 荒浜小に来館してからの自身の変化

象とした利用実態や認識・評価に関する調査を実施した。その結果、主に1) 荒浜小では来館者が高い満足度や学びに対する強い実感が得られていた、2) メモ館では来館者の期待と実際の施設の内容に不一致があり、高い満足度が得られていない可能性がある、という点が明らかになった。今後は、震災復興メモリアル施設として効果的に機能するための内容・在り方について議論するとともに、来館者に与えた行動面での変化についても明らかにしていきたい。

謝辞

本調査研究は、仙台市まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室と共同で実施したものである。記して感謝申し上げます。

参 考 文 献

仙台市：仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書～東日本大震災の記憶と経験を未来へ、世界へ、つなぐ提言～（平成26年12月）<http://www.city.sendai.jp/kankyo/shise/daishinsai/fukko/memorial/documents/houkokusyo.pdf>